ナイン国物語

希羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナイン国物語

【Ｎコード】
Ｎ７２７１Ｂ

【作者名】
希羅

【あらすじ】
ナイン国は中世の時代に近い設定です。人々を癒す水の湧き出る泉で一人の少女と出会う。その少女は実は遥か昔世界を震わせた少女であった。その力を狙う他国がスパイを送りこんできた。

第一話　ショウ王子とサガラ

ここはナインとゆう国。隣には大きくて栄えているジュエルとゆう国がある。
ナインは小さいけど水が、自然がきれいな国でいつも風に緩やかに擦れ合う木々の音、川のゆっくり流れる音が心地よく響いていた。
ナインのもう一つの魅力は、水にある。ナインの水は万病にきくとゆう。いつも病気で悩み、苦しむ人や家族が水をはるばるナインまで汲みに来ていた。
水は神聖水として、世界に知られていた。水汲み場はナイン国を囲む塀の、腰程の高さに空いている小さな穴からちょろちょろ流れている所だ。
　そこから水を汲む人々の列を城の塔の上から見下ろしている姿があった。
「なぁ、サガラ」
「なんですか？ショウ王子。ご飯ならさっき食べましたよ？」
顔が赤くなり、今までみていた水汲み場から一瞬顔をあげてサガラを見る。
「サガラ、俺はお腹へってないよ！そうじゃなくて・・・。最近、水汲み場にくる人、増えた気がするんだ。」
水汲み場を眺めるまだ幼さの残る灰色に少し緑がかった大きな綺麗な目の王子。髪のいろは綺麗な金色。女の子のように見える整った顔とすらりとした容姿。身長は１７０センチ位だ。
　そんな城のみんなに愛される王子。その横ではほほ笑み、王子を見つめる男。サガラがいる。
サガラはショウ王子の執事だ。とても仲がよく、よくショウ王子の他愛ない相談にのったりしている。
「そうですね。言われてみれば。ジュエル国とゼット国が今争いを起こしてますからね。

ここは、平和ですね。ショウ王子がみんなを愛してますから。みんなもとても尊敬していますよ。」
ほほ笑みサガラが言う。それをきいて恥ずかしそうに少し赤くなるショウ王子。
サガラは綺麗な中性的な魅力のある男性だ。片方の目は斜めにたれた前髪から少しかいま見える。紫色に少し黄色が交ざったような瞳と高い鼻をした色白の端正に整った顔。
黒い細目に作られた服が良く似合っている。
「民が国だ。俺は戦なんてしたくない。小さい、大きいの問題じゃないんだ。幸せに生きてほしい。みんなを守ってゆくんだ。」
サガラの目を真っすぐに見つめながら言った。
「ショウ王子の執事になれて、私は幸せですよ。」
「なっ、なんだょ。突然。あっありがとう、サガラ。」
みるみる赤くなるショウ王子に静かに笑う。

いつまでも続いて欲しい。でもそんなに簡単には行かない。でも、歩くしかないから。親父が死んで、俺しかいない。守るんだ。みんなを。大切な友達を。
「王子、あそこ、白馬で走るのはヒートじゃないですか？」
午後の暖かいゆるやかな空気に感慨ふけってると、サガラが何かに気付いたようでサガラが指す方へと視線を代える。
「え？ヒート？どこ？見えない」
「あぁ、王子。背がもう少しのびたら見えるかもしれませんね。」
確かに。サガラはショウより１５センチ位高い。

第一話　ショウ王子とサガラ2

サガラはショウがからかうとおもしろくて、よくからかって遊んでいる。
「なんだよ。身長なんて関係ないよ。あの木が邪魔なだけだって。」
ちょっとふくれるショウ。
「あっ、見えた。ヒートだ。ヒートはいつも馬で楽しそうに走ってるよな。
あいつの早さにはかなわないよ。」
「そうですね。いつも元気で明るくて、笑わせてくれる。王子のいい友ですね。」
ヒートは、王子と同い年で、この城で働く用兵だ。髪はアッシュで長めのショートだ。身長はショウより少し低く、腰に剣を下げて、赤いマントがよく似合う。笑顔が可愛くて、ショウとは親友なかだ。ヒートは剣の腕がナイン一で、普通は剣が折れてしまうような岩さえ切れる。
ヒートはその力でショウを、ナイン国を守るためにと幼くして騎士に志願してきた。もうヒートが城にきて三年たつ。
いまでは二番隊を率いる隊長になっている。
「またあそこにいくのかな。」
「あそことは、このナインに広がる水の湧き出る泉のことですか？」
「あぁ。一回俺も連れてってもらったことがあるんだ。この世とは思えない、とても綺麗なところだったよ。水がきらきら透き通って、深いそこまで見えるんだ。一部すごく深すぎて見えないとこがあったけど、サガラを今度連れてってあげたいよ。」
「ぜひお願いしますと言いたいところですが、あそこは神聖なところ。そこへ行くのは禁止されてるはず。王子が守らずしてどうしますか。
民がみておりますよ。ヒートにも言わなければなりませんね。」

「いや、それが、あそこは不思議なところで、他に何人か秘密に行こうとしてる人がいるらしいんだけど、辿り着かないんだ。
不思議な結界に守られているみたいなんだ。ヒートと一緒じゃなきゃいけないんだ。前に俺も一人で行こうとしたけど、真っすぐ進んだはずなのに、回って戻ってきちゃうんだ。」
「なるほど。何人かいるとゆうことは、王子が間違えたとゆうことではなさそうですね。
先代の王がほどこしたんでしょうか。」
「なんか、俺一人だと疑うようなことばが入ってたけど・・・。」
「ふふ。どうでしょうね。では、今度王子とヒートとご一緒しましょうか。」
「あぁ。ヒートにゆっとくよ。楽しみだなぁ。早くあの光景をもう一度みたいよ。」
もうヒートが過ぎ去って見えなくなったところを見つめながら話をしていたら、いつのまにか空が暮れてきていた。
まだまだ神聖水を汲む列はたえないが、夜は危険なため、汲むのを禁じている。人々に時間だ、また後日、と大きな声で呼び掛ける兵。
そして二人態勢で夜は監視をつけている。
みんなの希望を守るために。
そんな光景をサガラと二人で眺めている。
「そろそろ夕飯ですよ。お部屋に一旦戻りましょう。」
夕日に少し影がさし、ますます綺麗に見えるサガラ。
「だな。お腹へったよ。」
そして二人部屋に戻っていった。

第二話　出会い

少し赤みがかった空の下、木々の間のみちを白馬を走らせる姿がある。
　気付いたんだ。夕日に照らされた泉はとても綺麗なんじゃないかって。
　もう少しで日が沈んでしまう。いそがないと。
なぜか俺しかいけない神聖な場所、そして安らげる場所。
そう思って急いで白馬、トーリスを走らせる。
　泉が木々の間から見えてきた。

もうすぐ。

木を抜けると開けた場所にでる。

　今日も静かに日は流れ、暮れようとしている。
「今日も鳥のヒッピーの歌が聞けて幸せだったよ。また私の小枝にとまって欲しいわ」と木が話してくる。
「そうね。心が澄んでいくような綺麗な声ね。」
「リーアにも歌ってほしかったわ。リーアが歌うと私たちは元気になるの。ほら、私の隣に最近降りたばかりの種がもう芽が出てるわ。」と木は言う。その下に芽吹いたばかりの若いこれから大きくなる

であろう新芽がでていた。
「そうね。ありがとう。みんな愛してるわ。」
泉のうえに一人の少女が立っている。当たり前のように立ち、近くの木と会話している。
その姿は人とは思えない、とても美しい少女だった。歳は１６位、少し薄い青と黄緑が交ざる大きな瞳と長いまつげ。シルバーに少し水色を足したような長いストレートに腰まで伸びる髪。肌は透き通るように白く、きている飾り気のない白いワンピースがとてもにあう。すらりと伸びた足は、泉のうえに浮かんでいる。
ここに住まう水の女神、リーア。人がこれないように、結界をはって守っている。木や鳥、すべてのものと会話ができる。
神様から命を授かってもう長い年月、この世界の水を守っている。

「また来たよ、あの子が。リーア隠れて。」鳥のヒッピーが肩に止まり、教えてくれた。なぜか、一人だけ私の結界が効かない人間がいた。
一度人間界に人として生まれた時以外人とまともにあったことがなかった。
この泉に戻って年月がたった時、一人の男の子が迷いこんできた。それからよくきているが、みんなに教えてもらって事前に隠れて見守っている。
綺麗な自然の様な心に結界が反応しないらしい。
「急いで。今日はなぜかあわててるの。トーリスが理由があってこれ以上遅くできないみたい。」ヒッピーが早口で急いでいる。
「わかったわ。じゃあまたね、リーフ。」
木に一言残して泉の上を隠れ家にむかって歩きだしたその時、ザッっという音と共に、何かが現われた。

！

見られた。やばい――――。その瞬間、能力をストップした。

ドボン

泉に沈んでいく。泉の上にいたこと一瞬わすれてしまい、急に人間に姿を変えたため、落ちてしまった。

息が、意識が遠くなる。

――――――――。

第二話　出会い２

ザッ
木々の間を抜け、視界が広がった。
間に合った。
朱色に波打つ水面。
反射して眩しい。
そんな美しい光景もかてないような、
信じられないような、
違うものにひかれていた。

それは一枚の羽程の重さしかないのか、水面の上に立っている。そして水色の瞳を大きく開いて驚いた顔をしてこっちを見ている。

・・・あの子は、一体・・・。

ドボン

！！
さっきまで当たり前のごとく水面にたっていたのに、泉の底へと落ちていく──
「──っ！おいっ！」
俺は泉に必死で走った。

ヒートは上着を走りながらバッと脱ぎ捨て、綺麗な円を描いて泉の中に飛び込んだ。隊にいるため、緊急事態に俊敏に対応できる。

泉をいつも眺めているけど、触れるのも初めてだった。中から見る泉は青白く世界を照らしていた。すべてを見渡せる青白い世界。土から飛び出した木の根の先端まではっきり見えた。
その中でヒートは懸命に一つの場所へむかっていた。
走るより遅いスピードにもどかしさを感じながら、青白く照らされた少女のもとへ急ぐ。

あと少しで手が触れる。

――――つかんだ。

そのままぐいっと抱き寄せ、上に向かって泳ぐ。

もう息が・・・限界だっ。くそっ、もう少し。あと少しで！

ガバッ
・・・間に合った。
はっ、少女は？
少女の目を閉じたままの顔を見つめる。さっき見たときはシルバーに青みがかったような髪の色だと思ったのに、今は金色で軽いウェーブがかかっている。あれ、でも今はそんな場合じゃない。
整ったその顔から何もはっせられない。
やばいな、急いで陸に戻らないと。

ヒートは少女を気遣いながら陸まで泳ぎはじめる。

陸に上がり、少女を寝かせる。胸に耳を傾ける。
「・・・動いてる。」

そうゆうと、大の字にバタンと倒れる。安心した。
よかった。
俺が来たせいで驚かせたため、少女は落ちた。
罪悪感と不安で恐かったのだ。

そうだ。城につれていこう。城でゆっくり休ませて治療してもらおう。

ヒートは、水がしたたる髪を掻き上げ、ゆっくりと立ち上がり、まだ意識のない少女を抱き上げ白馬の後ろに乗せる。前に自分がまたがり、じぶんの上着を少女にかけた。
「ゆっくり慎重に走れよ。落とさないように。わかったか？」
ゆっくりとうなずき、走りはじめる。

早く目を覚ましてくれ。　祈りとともに手綱を握り締めた。

第三話　ジトラ

もう日も暮れ、夜を司る星達が空を彩っていた。
城の中へと続く階段の上段に腰を降ろし、闇を見つめる一人の男がいた。
闇が似合う、ケモノのようなにらむと動けなくなるような鋭い眼光。濃い漆黒の髪。さわさわと風がなでていく。立つと身長は１８５センチ程ある。すらりとした長い足。
黒いマントがよく似合う。隊をマントで色分けしている。黒は一番隊。そしてその隊長がこの男である。それと同時にすべての隊をまとめる総隊長の役についている。細腕に綺麗な筋肉の筋がみえる。かた膝に腕を乗せ、唇をなぞって、イライラと闇を見つめていた。
「・・・遅い。」
一言つぶやく。
あいつは一体何をしてるんだ。もう戻ってもおかしくない時間をとうにすぎている。敵か？何かあったのか？それともいつもどおりどっかで昼寝して寝すぎてんのか。
ったく。あいつは。捜しにいくか。最近ここにもスパイがいるらしい噂もある。事が大きくなって王子に心配をかける前に。
出かけた芽は狩る――。

と、考えていると、闇の中から馬のヒズメの音が響いてきた。
鋭い目を細め、あわてもせず、音のする方を見つめる。
あいつか？・・・この音はトーリス。なぜこんなにゆっくりなんだ？
音は近づいてくる。暗やみを抜け、見えてきた。
「ヒート。」
闇にたたずんでいた男がヒートの姿が確認できると立ち上がり、階段をゆっくり降りはじめる。

「何時だと思ってるんだ。王子の警護はどうした。・・・？後ろに何を乗せている？」
男は後ろに何かのっているのに気付いた。
「ジトラ！」
ジトラの姿に気付き、安心したようにヒートが叫ぶ。
「・・・よかった。ジトラ、早くこの人を部屋へ。お願いします！」
まだ目をさまさない少女を心配そうに一度見てジトラに言った。
ジトラの前にトーリスがとまる。
「どうした？ずぶ濡れじゃないか。何かあったのか？」
「理由はあとで話します。まず部屋へ。俺は医療班を呼んできます。すいません、お願いします。」
「了解した。」
ヒートの必死さに、事態を飲み込み、ジトラは少女を馬から降ろすように抱き上げ、そのまま城へと歩きだした。
「トーリス、納屋へ戻れ。ありがとな。」
そう言いながら、ヒートもトーリスを降りて後を追って城へ入った。
バタン
入り口が閉まると、
「じゃあ俺は連れてきます！」
ヒートは走りだした。

ジトラも少女を抱えて部屋に歩きだした。
冷たい。呼吸はあるから大丈夫だ。
・・・にしても、こいつは誰なんだ？
金色の長いゆるく波打つ髪。濡れて光っていた。ジトラの足音にあわせて揺れる。

第四話　ナイン城

――あったかい

感覚がゆっくりもどってくる。
私は今どこに？
確か泉に落ちて・・・

ゆっくりと目を開いてみる。
ここは？
白いベットの上に寝かせてもらっている。
どこだろう？窓から月明かりが注いでいる。
照らされた部屋の中を見渡す。四方を白い壁で囲まれた部屋でベットの横に窓がある。高い所みたいで月明かりにとおくの木々が見える。あの奥には、泉がある。
布団から腕を出してみる。衣服が着てたものとは違う、白いふわりとした袖になっている。レースに着飾られた袖口をみて、濡れていた服も着替えさせてもらっていることに気付く。
また見渡してみる。横にある衣裳ダンスは白に黄色を足したような色で繊細な細工が施され、バラなどの花の絵が高級感を思わせる。
ベットの足のほうにある化粧机も同様で大きな三面鏡がある。
きっと裕福な方のお家なのかしら。ここはお城？
この辺りだとナイン城かしら。
夕暮れまでは覚えてる。それからどれくらい時間がたったんだろう・・・？

ふとベットの横に重みを感じそっちの方を見てみる。月に照らされてすやすや眠る横顔がみえた。
椅子に腰掛けて腕に顔をあずけ眠っている。

あの時みた男の子。このお城に住んでるのかしら？ずっと付いててくれたの・・・？
少しほほ笑み、私は腰を起こしてベットの背にもたれる。
その静かな振動でヒートは起きた。ゆっくり目を開け、少女の姿を確認し、安堵したように、ふぅと一息ついて、
「よかった」と言った。
「ありがとう。もう大丈夫です。ご迷惑おかけして、ごめんなさい。」
やさしい目。そして、さらさらと流れるような綺麗な声。
「・・・どうかしました？」はっと気付いたようにヒートは顔をそらす。
「いっいやぁ、大丈夫でよかった。今日はこの城に泊まっていって、よくなったら家に帰ったほうがいい。もう少しよこになってゆっくり休んでいけよ。王子の許可はとってるから。」
月に染められた顔は少し赤く、早口で言う。
「ありがとう。ではまた休みます。あなたも、お休みしてください。」
「あぁ。また明日朝くる。・・・と、その前に、名前聞いてもいいか？」
「リーア。あなたは？」
「ヒート。じゃあな。」　軽く手を振り、ドアがパタンとしまった音がして、ヒートは自分の部屋に戻った。

優しい方・・・。よかった。あの時以来、人には近づかなかったけれど、いつも見守ってたヒートは、やはり優しい方だった。まだ、あんな方がいるなんて。
もう少し、みてみたい。色んな物を、人を・・・。
怖くて・・・
無情に感じ、目をそらしたものを・・・。

いつのまにか、また深い眠りへと誘われた。

不思議な一日だった。椅子に腰掛けながら、蝋燭がちらちら揺れる明かりをみながら思った。
あの少女はどこから来たのだろう。俺しかいけなかったはずの泉にいて
しかも一瞬泉の上に立ってたように見えた。見間違いか？
姿も変わっている気がする。薄青い髪の色で真っすぐだった髪が今では金でゆるくうねっている。瞳の色も・・・。
しかし、綺麗だった。澄んだ泉の水のように・・・。そしてヒートも眠りの支度をして、明日ショウ王子に合わせようと思いながらベットに横になり、静かに目を閉じた。

第四話　ナイン城２

コンコン
ドアをノックする音が聞こえて目覚めた。
「ヒート、入るぞ。」
ジトラの声がドアの奥から聞こえ、中に入ってくる音が肌寒い空気に乾いて響く。
俺たち兵は、毎朝早起きで、五時頃起きて朝礼をし、少し稽古したり、城を見回ったりしている。
だが、鉄格子からのぞく小さな窓の世界はまだ朝焼けも出ていない。早すぎる。なんの用だろう。
意識がまだ眠くて起きてないが、ベットからゆるゆると体を起こしてベットから床に足をおろして座った。
頭をぽりぽり掻いてあくびを一つ。
ジトラは積み重ねられた石の壁につくように置かれた机とセットでできた古い椅子に静かに腰を掛けた。
机の横には、銀のカッチュウと真っすぐにのびた剣が置かれている。
六畳ばかりの狭い部屋。地下一階にある。
俺がここに志願した時からずっとここを部屋として使っている。
物はあまりない殺風景な部屋だ。
「昨晩の話だが。」
ジトラが足を組ながら話はじめた。
そうだ、昨日不思議な少女を城へ運んでもらったんだ。
「昨晩は突然ごめん。たすかったよ。・・・ん?、ジトラ、そういえばなぜあそこにいたんだ?」
「弟分の帰りが遅いんでな、何しでかしてくるのか、待ってたんだ。」
ゆっくりと無表情ながらに少し温かみが感じられる声。
ジトラ、俺の事待っててくれてたのか。

普段氷のように冷たい印象で、他の兵からは恐がられているが、実はとても根は優しい。
俺もそれに気付くのにだいぶかかった。今では弟のようにかわいがってくれてる。
冷徹な黒い瞳をして、みるものを凍らせ、敵をさばく姿。そのケモノのような、しかし華麗で繊細な剣さばきと容姿に、まわりの兵は戦場の黒き虎として、讃えられている。陰ながら慕っているものも多い。
「いつもごめん、ジトラ。ありがとう。」　　「いや、礼はいい。いつもの事だ。」
一息ついてからじっと俺を見つめる。嘘をつく事を許してくれないような目が見つめてくる。
「昨晩の女は、だれだ？」
やはり、そこか。
まだ王子にも詳しい事はふせて、町を巡回中に川で溺れてたのを助けたことにしていた。
泉に行くことは禁止されている。前にショウ王子を一度つれて行ったことがあるが、そのあと、今は亡き王に
「そこは聖域ぞ。王子であっても入ることは禁ず。偉大な神がそこにおる。怒らせてはならぬ。」
と、お叱りをうけた。
今、昨日そこに行って助けたなどと言ったら、サガラにもばれて、なんと叱られるかわかったもんじゃない。

第五話　国の状況

「俺にも隠し事をするのか？」
「いや・・・そんなつもりじゃないけど・・・。」
ジトラの視線をかわしながらしどろもどろしている。
「・・・サガラにばれたら、俺ここにいれなくなる。」
下をむいたままジトラを目だけ見上げてみると、ジトラは足を組んで椅子に横にかけ、背もたれに肘をついたまま、俺を見てる。
すごい威圧で、動けない草食動物のうさぎのようになる俺。
「・・・そうか。俺はなにをきいても、この国に害がないのなら怒らん。サガラが怖いなら、俺は言わん。
ただ、おまえがあの女をどこで見付け、なぜこの城へつれてきたか知りたいだけだ。今まで街を巡回しても、あんな娘がいた記憶はない。ちまたでは美形な方だ。なれば噂ぐらい聞きそうなはずだ。」
痛い所をつかれた。ショウやサガラは街にはめったに赴かない。だからかわせたが、ジトラはそうもいかないらしい。でも、ジトラなら信用できる。俺もよくなったら少女に素性を尋ねようと思ってた。
ジトラが一緒なら心強いかもしれない。
いつも強きな俺でもジトラとサガラの前じゃ、弱きになってしまう。
５才位年が離れてる分、兄のような安心感があるのかもしれない。
「今、この国も危ない状況なのはわかっているだろ？島国でこのナインの上に位置するガゼトニア国が強大な軍事力で領土拡大を狙っている。いつ、どんなやつがショウ王子の首を狙ってくるかわからん。スパイもいるかも知れない。」
そう、今豊富な資源が国々に別れて存在する。ナインは水と宝石、ガセトリアは炭鉱、鉄、銀などだから軍事力は強大だ。隣のドュエル国は食料と大きな領土。ドュエル国の、ナインとは逆の隣に一番小さいケラール国があり、ここは音楽と医療の国であり、いつも争いのときは中立であり、どこの国の者でも治癒してくれる。

今この四国が意志とは無関係に争いに馳せ参じようとしていた。
ガセトリアはケラールの医療をもわが力にしようと考えているらしい。
今はドュエル国の領土に目をつけ、両者睨み合いの冷戦がつづいている。
武器はガゼトリアが上だが、ドュエルには三強と呼ばれる、神にも崇められる兵が三人いる。そして広い領土なので兵の数もガゼトリアをゆうに三倍は越している。
「ジトラ、危ないってわかるまで、俺とジトラの秘密にしてもらえないか？あの子が危ないとは思えないけど・・・。」
ジトラはいつも俺の困ってる事を無愛想ながらに一緒に片付けてくれる。
まだ入ったばっかの頃、みんなにちびとかガキが何、兵隊ごっこしてんだってからかわれて、隅で一人でいたら、
「おまえは確かにガキかもしれんが、ここの誰より強くなれる気がする。俺の次に。まぁ頑張れよ。」と言って去っていった。休息所に戻ってみると、馬鹿にしてたやつら、ジトラにやられてのびてた。ジトラのほう見たら何事もなかったかのように、本読んでたけど。
ここにきてやっと友ができた時だった。
そして、いつも禁止されてた泉に行ってたこと、少女にあったことを、ジトラに全部話した。
空に朝焼けが表れ、すこしずつ色が鮮やかによみがえっていった。

第六話　リーアの正体

コンコン
誰かが戸をたたいてる。
ヒートかな？
ベット横の窓辺に、小鳥のヒッピーの姿がある。
泉に落ち、その後人間の世界に連れ出されたリーアを心配していつも出てこない泉の森の外へと飛び出てきたらしい。
「見舞ってくれてありがとう。早くお戻り。見つかってしまいます。」
まだ不安そうに、窓辺に止まりくびをかしげるヒッピー。
「私なら大丈夫。すぐに泉にかえるから。」
その言葉を聞いて、
「約束だよ」と、ピッと短く鳴いて泉の森へと飛び立っていった。
ヒッピーの黄色い羽に光が反射して眩しい。
ヒッピーが飛び立ったのを確認して、どうぞと、なかへ戸口の方を見て言った。
「はいるぞ。」　　見たことのない、長身の黒髪の男性が入ってきた。
その後ろからヒートが入ってきた。
感情が感じられない切れ長の目に黒い瞳。白肌にくっきりと見える。
とまどってヒートの方をむく。
「心配しなくて大丈夫だよ。無愛想な顔してるけど、やさしいんだ。」
私のとまどってる姿を見てほほえむヒート。
ゴホンと咳払いをして、
「悪かったな無愛想で。」
とヒートをにらむ黒い瞳の男。
「俺の名はジトラ。おまえはリーアだな？」

「そうです。昨日はありがとうございます。」
ジトラはつかつかと私のベットの横の椅子まで歩き、腰をおろす。足を組ながら、
「礼はいらん。ヒートの頼みで運んだまでだ。」
「運んでくださったんですか！？重くてごめんなさい」
この方に運んでもらったのは知らなかった。
はずかしくて、顔に熱があがってくる。
「いや、おまえを運ぶくらい、造作ないことだ。」
「リーアは軽いよ。な？ジトラ。」
ヒートがジトラの隣でジトラの椅子の背もたれに手をかけながら言った。
「おまえはまだ黙ってろ、バカ。そうゆう話をしにきたわけじゃない。だんらんして、どうすんだよ。」
ヒートの方をにらみながらジトラがいう。
「ばかっていったな！まぁいいけど。」
ちょっとふてくされるヒート。
仲のよさそうな二人に、くすっと笑うと、二人でこっちをむいた。
「仲いいんですね。兄弟みたい。」
「まぁ、同志だからな。俺はこの城に使える兵だ。隊全部の総指揮をとる。あと、ナイン国の全体の治安を見ている。」
「俺は二番隊の指揮をとってるんだ。」
少し誇りを胸にいうヒート。
急にジトラは真剣な面持ちで私を見つめる。
「ところで、俺はおまえを知らない。おまえはどこから来た？」

第七話　アスリアバージウス

「私は・・・」
本当の事は言えない。
私は人間じゃないなんて言えない。
他言できない事。
嘘はつけない。それは、私が許せない。一体、どうしたら・・・。

しばらく、沈黙がつづき、空気がピンと張り詰め、突き刺さってくる。
私は一点、黒い瞳を何を語ればよいか、見る事しかできず、みな言葉を探っていた。
私の神話を知る者もいる。へたに話す事はできない。
「話せないのか？ならば、帰す事はできない。話すまで、ここにいてもらうしかない。外に出る事もゆるされない。」
ピンと張り詰めた空気が重みを帯び、冷たく辺りを包んでいく。
何も言えず、私はベットの布団をつかんで、うつむく。
「わかるけど、それはないだろ？ジトラ、この子は悪くない。もとはと言えば俺のせいで・・・。」
「うるさい。今そんなことは言ってられない。俺にもわかってる。だが、油断できない。事がなってからでは遅い。」
「・・・でも」
「わかってるだろ？今の世界を。まだガゼトリアとデュエルが睨み合いをしているが、ナインにいつ手が放たれるかわからない。・・・そして、ヒート。お前の話を聞いて、俺は一つ、思い当たることがある。」
ジトラはリーアに向けた視線をそらす事無く話を続ける。
「・・・？なにが思い当たるんだ？」
「ナインには、知られていないどこの国もがみな欲しがるものがあ

る。」
「水か？宝石？」
「違う。知られていないものだ。ナインでも、今は亡き王とサガラぐらいの限られた者しかしらん。俺は、伝承師のばぁさんに幼い頃一度聞いた事があった。もしかしたらガセトリアなどの軍事国のお偉いさんには知られているかもしれない。奪いに来たときは、かならず守れと教えられた。」
ヒートは、口に手をあて、しばらく考えるが、おもいつかないみたいだった。

ギクリと、体が震えた。
知られている。そして、目の前にいる事も。
信じる、人を、できるだろうか。私は、人を・・・、唯一怖れてしまったから。
「その誰もが欲しがるものの名を、アスリアバージウスとゆう。」
「ん？それって、この泉の創造主として神話に出てくる女神の名だろ？実在にいるのか？それがどうしたんだ？いい女神なのに、何で・・・？」
ヒートはわけがわからない感じでジトラに尋ねた。
「俺もばぁさんに聞くまではそう、思っていた。お前はアスリアバージウスだろ？水色がかったシルバーの髪をしてるとばぁさんも言っていた。出会ったとき、ヒートは水色の髪の色を見ている。」
リーアとジトラの間に緊張の糸がはっていく。一瞬の沈黙を、リーアがやぶった。
「あなた達は、それを聞いたら、どうしますか？」

リーアは否定するでもなく、ジトラの黒き瞳を見つめ、逆に問いかけてきた。

ヒートは、その瞳に希望と絶望の二つが交じっているようにみえた。

第七話　アスリアバージウス２

沈黙が部屋を満たす。
リーアは何かを探るように、俺たちを見ている。

俺は、まだ謎が多くて、全然理解できてない。
泉は狙われておかしくない。万病に効く聖神水が湧く泉。きっと、戦で傷ついた兵の回復に役立つだろう。
しかし、リーアが神だとしてもなぜ手に入れたいのかわからない。破壊の神でも、再生の神でもない。泉さえ手にいれればそれでいいのではないか？
水の女神が戦いになんの利用価値があるのか？　「・・・俺はリーアがどんな力をもってるか全然わかんないけど、俺は、リーアのこと守る。」
リーアは悪いやつじゃない。俺にはわかるから。
「ジトラだってそうだろ？リーアは悪いやつじゃない。」
「・・・確かに。悪いやつじゃない。リーアの力を使って世界を戦へ導く気もない。ナインを守りたいだけだ。だから、俺はおまえを守る。」
「・・・ありがとう。」
リーアはほっと胸を撫で下ろす。
「私は、争いを好み、平気で殺戮を繰り広げる、そんな人たちをみてきました。人のため、自然を壊し、鳥や動物たちの住めない開拓をした。みな人は貪欲なのだと、思っていました。」
遠くでサワサワと木々がこすれる音が聞こえる。
遠い目を窓に向けながら、リーアは言った。
「でも、違っていました。前世の母のようなやさしさをあなた達は持っている。人の優しさを私は思い出しました。」
窓から俺たちにゆっくりリーアの視線が移動する。

「私は、自分の泉のあるこの土地に、ナイン国が生まれてよかったと思います。」
リーアがほほえむ。
「まぁ、俺はナインをこのまま、守っていくことに関しては貪欲だがな。」
ジトラは少しほほえんで言った。
「そう、私は神に命をわけ与えていただいた、水の女神、アスリアバージウスです。」

その後、少し談笑して俺たちは部屋をでた。リーアはよくなったので今日泉に戻る。ただ、これからは泉にいけば姿を表してくれるといっていた。
過去になにがあったかわからないけど、人間を恐れていたらしい。

そして、ショウ王子とサガラには話していいと言ってくれた。

この時はまだ何もわからなかったんだ。

ただ、リーアに毎日会いに行こうと思ったんだ。

第八話　ガゼトリア国

濃い蒸気が、黒い地面の裂け目からもうもうと湧いている。ゆっくりと空気に充満していく。すべてを極熱で飲み込むように。
火山が噴火し、マグマが固まって出来た気味の悪い黒い地面はまた赤く流れ出る時を待っている。
流動の後を地面のみならず海へむかい、潜り込み、国を包むかのごとく残している。
その遥か先に、霧から頭をのぞかせ不気味に黒い城が高くそびえている。
大地は空にあがった灰の雲から漏れだす光を浴び、薄暗く浮かび上がっている。かつて、この黒い大地にはガゼトリア国最大の都市があった。明るい光に照らされ、活気のあるその都市の名はアラゲム。ドゥエル国側にある海岸の都市で、貿易が盛んであった。今は人が住むことさえ許さない。
そう、アラゲムの横に気高く不気味にそびえ立つ、最高峰の活火山ザグラが許さない。

――――――ガゼトリア城内

ザグラ山は今まで休止火山で、ここ５００年以上噴火したことがなかった。この都市で立っているのはガゼトリア城だけになってしまった。
国の情勢は極めて最悪の事態だ。復活の目処もない。まだ民を国を食らうつもりか。
城の最上階、ガセトリアの王ウルの部屋がある。
壁は白く、窓にかかるカーテン、床に敷かれた絨毯は赤地、細かい

刺繍と淵は金で統一され、王の部屋にふさわしい高貴な空間にできている。
広い室内を見渡すように、大きい絵画の前にある、背もたれが長い赤い椅子に座るのがウル王である。
金色の肘掛に肘をつき、頬を手で支えている。
国の情勢を思案し、疲れ切った顔をしている。
白い顔に憂いを含んだ大きな赤茶色の目、長く高い鼻、ふっくらした唇がくっきりと浮かび高貴な美しさがうかがえる。繊細そうだがまわりを寄せ付けないような気高い雰囲気がある。
まだ若い２８才の王である。国土の１／５がマグマに埋まり、五万以上の民が飲まれた。城の反対側にある市の数々は貧困に蝕まれまれ始めた。
思案していると、ドアをたたく音が響いた。
「入れ。」
「失礼いたします。ウル王、現状を報告させていただきます。」
総隊長のカイリが入ってきて、深く敬礼をした。
「申せ。」
「はっ。現状は悪化の糸をたどっております。灰の雨がまわりの残された都市に降り注ぎ、作物も育たず、みな空腹に苦しんでいます。」
「それだけじゃない。狂気が心を侵食している。」
いつのまにか、部屋の片隅に座っていたレイトがぼそっと言って立ち上がった。
いつも突然あらわれ、霧のように消えていく。レイトはこの国一番のスパイである。そして、遠くからも的を外さない、銃の腕前をもっている。
ここにいて当たり前のごとく、どこから表れたか聞くものはいない。
「ウル、おまえの心にも狂気がまとわりついている。俺はどうであれかまわない。ウルに従うまでだ。」
レイトは俺に従順なまでに従順だが、感情はないらしい。

殺しも、罠にはめることもなんとも思っていない。
いつも何を考えているかわからない。
雇ってくれと五年前突然現われた。過去は一度も話そうとしなかった。いや、聞けない。
淀んだ藍色の目が、何も聞かせない。
白髪が無造作に跳ねた髪を上下に揺らしながら、目を俺に向けながらゆっくり歩いてくる。
「ふん・・・、俺の中の狂気か。確かに、鬼になるしかあるまい。この状況を打破するために。
ちょうどいい、レイト、おまえに用があった。」
レイトはカイトの前に立ち、俺と対峙すると歩みをやめた。
「言え。ウル。俺は生まれ出でた時から狂気だ。」

第八話　ガゼトリア国2

ウル王はその夜、明かりのない濃い闇の充満する地下へと通じる階段を、ゆらめく蝋燭の明かりをたよりにゆっくり降りていく。
地下室にいくには異様に長い階段。先は闇に吸い込まれ見えない。
カツ、カツと石に靴があたる音が不気味な静寂のなかに響いている。
ウル王しか行くことの許されない聖地。
ガゼトリア国の王と側近のみしか知り得ることのない所。

レイトにも来たるべき指示は出した。
カイリも今動いている。
私は神をも動かそうとしている。
奪うしかない。ガゼトリアはもはや、死に絶えようとしている。

灰と溶岩に奪われた。

だが、こうなることはわかっていた。
一ヵ月前、ザグラ山が噴火する以前に、一人予言したものがいた。

最後の一段を下り、険しく岩を削り進んだだけの狭い通路を進んでゆく。
その岩窟の先には、朱色のひかりがあふれている。眩しいくらいに朱い光に、不要になった蝋燭の炎を軽く吹き消す。
ウル王は蝋燭を岩窟の下に置き、朱にむかって歩きだした。
その光は徐々に、ウル王の毒を秘めた美しい顔を朱で、妖艶に染め上げていく。
岩窟は終わりをつげ、巨大な広場にでた。
眩しさに目が慣れると、全貌が見える。
円状に広がるそこには、また円状の巨大な穴が中心に空き、下にマ

グマが見える。ごぼごぼと生きてるかのごとく気泡を幾重も上げている。
「ガゼルフィア、俺だ。姿を表せ。」
ガゼルフィア。ガゼトリア誕生古来より、この地の神として祭られてきた存在。
破壊と炎の神である。
辺りは静寂に支配される。マグマの気泡を吐き出す音以外邪魔するものはない。
「あら、ウル。あなた、相変わらず言葉使いに気を付けたほういいわよ？」
姿は見えないが、中から妖艶な声が静寂を破り聞こえてきた。

「早く姿をみせろ。」　「そんなに急がせちゃだめよ。そんなんじゃ、もてないわよ？」
笑いを含んだ声がまた中から響いた。
それからゆっくり、マグマから姿が浮かびあがってきた。
真っ赤な派手なドレスに身をつつんだ女性が少しずつ近づいてくる。
薄い絹を肩から掛け、ブレスレットにつながり、ひらひらとはためいている。
「それで、話って何？私の眠りをさまたげたんだから、それなりの話をしないと焼き殺すわよ。」
けだるそうに腰に届く緩やかなウェーブを揺らしながら歩いてくる。
ウル王の前に密着するようにして立ち止まり、軽くウル王の顎をさすりながら吐息をかける。
「戦がはじまる。」　ウル王はただ煩わしいとでもゆうように、その女を見下ろしていた。
「ふーん、大方、予想どうりね。」
顔に吐息がかかるほど密着してくる。
「まぁ、ザグラが噴火するのはわかってたけどまさかここまでとわね。それに、また近いうちに噴火するわ。あと、一週間程かしら。」

くるっとウル王に背をむけ、石で出来た宝石をいくつもあしらった椅子へとゆっくり歩いていく。
「まぁ、前の噴火の時も言ったけど、止めてあげてもいいのよ？」
そういいながら、椅子に腰をかける。
ウル王を挑発的に誘う目は燃えるように紅い。
「俺も前に言ったが、それはいらない。」
「一国の主人が、何故ゆえ国をまもらない？」
「もう動きだしている。止めることもかなわない。これから他国を含め、戦に導いていく。」
「なぜ？平和がお嫌い？
まぁ、私はガゼトリアの創立から行く末迄見届けるのが契約だからなんとも言わないわ。
この国の崩壊だけが私が解放される時。
いい子ぶるのもさすがに飽きたわ。早く胸の刻印が消されることを祈るだけ。
言っとくけどね、私はガゼトリアを一番憎んでるわよ？
私を、神をここへと縛り付ける、おろかなガゼトリアを。私は呪い続けるわ。」
そういいながら左胸の上に付けられた刻印を触る。
ガゼトリアはその昔、魔道師達の棲む国だった。立っている木はどす黒く枯れ実りもなにもない、火山灰の上に生を見いだせるものは生きる悪魔達だけだった。魔道師たちは集まり、ここに国を作ろうとしていた。
他国から人をさらい、魔術を試し、くぐつを作り出したり、生き血を使い黒魔術を習得していった。
そして、他国は何度も魔道師達を滅ぼそうと立ち上がったが、ことごとく敗北におわる。
血塗られた歴史は１００年の長きに渡り繰り返された。
その間、魔道師達も陰りの色が濃くなる。
一人の魔道師、ガゼトリアは、名も無きこの荒れ、枯れはてた地に

国を作ろうとゆう野望をまだ燃やしていた。
一人、神をも揺るがす黒魔術を完成させる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7271b/

ナイン国物語

2010年11月19日17時25分発行